

新たな指標が創る Well-Beingなコミュニティ

2022.10.3 [Mon.]
於 京都商工会議所

シンポジウム開催いたしました！

日本テレネット株式会社とスマートライフ研究所は「京都大学・九州大学との共同研究」で構築する「人 中心のWell-Beingな人生に向けた指標」を、新たに開発した「コミュニティ・サービス・プラットフォーム」に実装し、その測定実験を10月より開始するに合わせ、10月3日(月) 13:00~14:30 京都商工会議所にて、WEB配信も併せシンポジウムを開催いたしました。



01 Policy [事業の基本方針]

『私たちは「Well-Beingな 豊かで あたたかな コミュニティ」の創出を目指します!』

一人ひとりが「自分らしく いきいき 暮らす」コミュニティ(生活圏)を創出し、健康の維持を基本に、社会とのつながりを持ちながら、生きがいのある生活が営むことのできる、「共生社会」の実現に挑戦いたします。

02 Outline [実装実験の概要]

「コミュニティ・サービス・プラットフォーム」では、健康マネジメントサービス、生活支援マッチングサービス、コミュニティメディアサービスの3つのサービスを提供し、そこに「一人ひとりの幸福感」と「地域との関係性」を測定する、以下の3つの指標を実装し検証します。

指標

IWI (Inclusive Wealth Index)：新国富指標

自然資本・人的資本・人工資本により構成され、国や地域の持続可能性を現す指標

CWI (Community Wealth Index)：地域コミュニティ指標

暮らしやすさ、地域への愛着等「人と地域の関係性」を含めた「地域がもつ有形・無形資産」を現す指標

WBI (Well-Being Index)：幸福指標

地域社会レベルで生じる幸福にまつわる諸側面を測定する主観指標

モニター

京都市東山区と左京区の一部地域のシニア層モニター300名

検証期間

2022年10月から2023年3月末まで





日本テレネット株式会社 会長兼社長
瀧 麻由香



Team e-concierge Project オーナー
日本テレネット株式会社 ファウンダー名誉会長
瀧 栄治郎



スマートライフ研究所 所長
月尾 嘉男

御礼挨拶

弊社の新規事業にご期待を！

日本テレネット株式会社 会長兼社長 瀧 麻由香

プロジェクトオーナー挨拶

3つの指標に基づく、高度情報化社会に対応したコミュニティの価値を創出 公・学・民のコーポレーションにより、住民主導による草の根活動へ

Team e-concierge Project オーナー 日本テレネット株式会社 ファウンダー名誉会長 瀧 栄治郎

キーノートスピーチ

テーマ：「欲望の関数としての幸福」～ 東洋・日本のような伝統文化を反映した幸福を考えていく ～

講 師：スマートライフ研究所 所長 月尾 嘉男



京都大学
内田 教授



九州大学
馬奈木 教授



兵庫大学
田中 客員教授

共同研究の先生方のご発表

「ウェルビーイングを実装する～文化心理学の視点から～」 Well-Beingとは何か／地域の幸福の測定指標／主観指標の大切さ
京都大学 教授 人と社会の未来研究院 内田 由紀子

「老後を地域で自分らしく生きるためのAIを活用した自立支援の構築」 健康寿命延伸のため、生活機能評価から意識と行動の変容を
兵庫大学 客員教授 田中 博一

「Well-Beingを高める 豊かな地域コミュニティづくり」 社会に対する価値観さえも数値化できる／新たな指標で地域の真のポテンシャルを提示
九州大学 主幹教授 都市研究センター長 馬奈木 俊介

パネルディスカッション

テーマ：新たな指標が創るWell-Beingなコミュニティとは

「宗教とWell-Being」「情報化の進展とWell-Being」「自然資本の限界と社会の維持」

ファシリテーター：月尾所長 パネリスト：内田教授・田中客員教授・馬奈木教授・瀧名誉会長

参加者のご感想等

「幸せ」について新たな視点から問い直そうという試みはとても斬新なものでした。

人は個人では幸せになることは難しく、他人や社会との協調・循環の中でこそ幸せが実感できるのだと改めて認識するとともに、そのための手段として生活機能情報があり、社会資源を活かすことが必要だと学びました。

人生100年時代を迎えるにあたり、人が幸せを実感できる地域社会の構築、さらには幸福度の見える化を図る取り組みが世界標準となることを期待しております。

それぞれの先生たちが研究の背景などを語っていただき、Well-Being、そして、Well-Beingがなぜ地域課題と連動するかがわかった。

現在の日本の高齢化が他人事ではなく、生活機能の改善や保持が重要であり、そのためのデータ化の意義を問われていると理解しました。

そして、それを通じ、現在のEコンシェルズの取り組み、そして、その難しさを教えていただいたような気がします。

各先生方のお話を聞かせていただき私が感じましたことは、御社の社会実装プロジェクトが各先生の研究の一部にきちんと位置づけられているということです。

どちらかと言えば大学の先生はアドバイザー的な役割が主なもので、コミットの度合とするとそれほど強い物ではなかったと思いますが、御社の今回のプロジェクトは、各先生の研究と歩みを共にしながら進められている見事な構図を作られているなぁというのが私の感想です。